

令和6年度

鳴門西学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- ①「基礎的・基本的な知識・技能の習得と言語活動の充実」
②「学び合いによる思考力・判断力・表現力の充実」
③「学校と家庭との連携による生活・学習習慣の確立」

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員

校長 教頭 佐藤 道代 研修主任 吉田 真由美
低学年推進員 2年学年主任 大野 実緒
中学年推進員 4年学年主任 播磨 佑輔
高学年推進員 6年学年主任 前田 晴雄

校長

内田 洋一

【各校の取組状況の把握について】

- ・指導技術や取組を共有できる研修(授業研究・グルーptーク等)を行う。
・学校評価やチェックシートなどを活用し、定期的に取組状況を把握する機会をもつ。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字の読み書きや四則計算などについては、ある程度の定着が見られる。 ○読書に興味・関心をもつ児童が多い。 ●学力の二極化傾向が見られる。 ●長い文章を正確に読み取ったり、身に付けた知識等を関連付けたりすることに課題がある。	・文章の内容を正しく読み取ったり、要点を抑えて話を聞いたりすることができる。 ・主述の整った文章を書くことや、自分の考えをまとめて書くことが習慣化している。 ・学習の過程を通して習得した知識を、他の学習の場面で活用することができる。	・「漢字・計算・視写・コグトレ・AIDリル」等を朝の学習時間にバランスよく位置づけ、計画的に取り組む。 ・ノートの書き方や板書等の校内モデルを必要に応じて検討する。 ・「徳島版読解力」を活用した取組を行う。 ・発達段階に応じて書く活動を工夫する。児童が書くことに慣れるようにする。 ・相互参観授業や教科別授業研究により、取組を教員間で共有する。	・「書く」力を高めるために効果的な実践を情報収集する。	・AIDリル等を朝の活動に位置づけ計画的に取り組めた。単元の振り返りやテスト前の復習等で活用することにより、知識が定着しやすくなった。 ・ノートの書き方や板書等について、校内モデルの作成には至らなかったが、相互参観授業を通して良い実践の共有ができた。 ・「書くこと」については、各教科で発達段階に応じた目標を示し、常に目標を意識して書かせることにより、まとまった文章が書ける児童が増えてきた。視写教材の活用も有効だった。	・ICT(AIDリル等)とプリント教材のそれぞれの良さを生かして効果的に活用する。 ・ノートの書き方や板書についての校内モデルを作成する。 ・書く力を育てるために、「あわスタ」の活用を検討する。友達の作文を批評し合う場を取り入れる等、文章の質を高めるための取組を行う。 ・学習が早く終わった児童が取り組める内容(プリントや「キュビナ」等)を工夫し、より個別の学びに対応できるようにする。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○体験活動を好み、意欲的に活動できる。調べ学習や目標が明確で見通しのつく課題には安心して取り組み、思ったことを素直に発表できる児童が多い。 ●語彙が少なくコミュニケーション力に課題のある児童が多い。 ●友達の意見を聞いて、自分の意見と比べたり自分の考えを整理したりして思考を深めることが難しい。	・調べたり体験したりした情報を整理し、自分の考えを自信をもって表現することができる。 ・自分の考えと比べながら、相手の意見を聞いたリ、複数の考えから新しい考えを創造したりすることができる。 ・ICTを効果的に活用して、思考をまとめたり表現したりすることができる。	・自力解決や、ペア・グループ学習の時間を設定し、児童の学び合いを充実させる。 ・発達段階に応じて発表(スピーチ等)の場を工夫する。 ・タブレット端末を活用した授業を実践する。ICT支援員との連携を深め、教師のスキルアップを含めた教材研究に努める。	・ペア、グループ学習において、話し合いの質を高める工夫をする。 ・各学級で、タブレットの思考場面で活用する実践を行う。	・各学級で、日常的にペアやグループ活動の場面を取り入れることを通して、互いに意見を聞く力や伝える力を高めることができた。また、より話し合いが深まる手立てについて、研究授業等を通して教師間で学び合った。 ・低学年から一人一人が自分の考えを全体場で発表する機会を積極的に設定することにより、自分の意見に自信を持ち、発表できる児童が増えた。 ・タブレットの活用については、表現のツールとして活用できた学年は多かったが、思考場面での活用については、十分とは言えなかった。	・学び合いを更に充実させるために、学級集団や発達段階に応じた話し合いの目標を検討する。「徳島版読解力」を活用する。 ・思考や表現のツールとしてタブレットを低学年から使うことを習慣づける。各学年で取組の目標を設定する。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○与えられた課題については真面目に取り組む児童が多い。家庭学習の習慣が定着してきた。 ●難しいことや疑問に思ったことを追究しようとする意欲が乏しい。学習の見通しをもって、主体的に取り組むことが難しい。 ●学習用具の準備・学習態度など、生活・学習習慣の定着が十分でない児童が一定数いる。	・学習の構えができている。 ・自分の学習の状況を振り返り、自らの課題を解決できるよう計画を立て、実践することができる。 ・家庭学習を自主的にに行い、問題解決に取り組むことができる。	・授業において明確な場面設定と活動目標(めあて)を提示する。児童が自らの学びを振り返る場をもつ。 ・授業や家庭学習で、個人差に応じた課題の出し方を工夫する。 ・定期的に「家庭学習の手引き」の見直しを行う。 ・「自学ノート」等の自主学習の方法を工夫する。 ・ユニバーサルデザインの視点で、どの児童も主体的に活動できる学習環境を整える。	・学習の目標が達成できるように、適切な活動目標(めあて)が提示できるようにする。	・全学年で授業のめあてを提示することにより、児童が見通しをもって学習に取り組むことができた。低学年から自分で考えることや自分でやってみることを意識づけ、できたことを教師が賞賛することにより、主体的な言動が増えた。 ・「自主学習ノート」の活用では、自分が興味を持った事柄を調べたり、定期的に学級でノートを見合ったりする機会を設定することにより、進んで学習に取り組める児童が増えた。 ・「家庭学習の手引き」を定期的に見直し、家庭への啓発を行ったが、学習習慣が身に付きにくい児童が一定数おり改善が難しかった。	・学校全体で、「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の授業の流れを統一し、子どもが自ら学びを深めることができるようにする。 ・授業のユニバーサルデザイン化を更に進める。 ・家庭学習に取り組みややすくするために、低学年から、自分で学習を進める機会を設けたり、自主学習の仕方を教えたりする。引き続き、家庭学習の手引きの見直しを行い、家庭への啓発を強化する。

令和6年度 学力向上ロードマップ

